説教20220925アモス書６：１－７ルカ１６：１９－３１「安息と安逸」

安息と安逸の違いを、キリスト教を全く知らない人に教えるとすれば、次のように言えるでしょう。安逸とは、聖書の初めに記してある、エデンの園での生活のことで、そこでアダムとイブは、性的にも道徳的にも堕落した罪多き暮らしをしていた。一方で、安息というのは、聖書の最後に記されている、新しいエルサレムでの生活のことで、それは着飾った花嫁の様にやって来て、クリスチャンは、主イエスのみそばにあって永遠の祝福と喜びの内に入れられる。のだと。

エデンの園と新しいエルサレムという二つの場所は、この様に全然違う場所なのですが、クリスチャンになって、最後まで主イエスを信じれば、私たちは、エデンの園から新しいエルサレムへと移り住むことが出来る、ということがキリスト教が説くところであります。

しかし、この分厚い聖書を細かく深く読んで行きますと、安息と安逸ということは、複雑にもつれあい、絡み合っていて、そんなに簡単に白黒が付けられる問題ではないことが分かってきます。例えば一人のクリスチャンの内にも、日曜日は教会で安息し、平日はこの世で安逸な生活をする、という安息と安逸が混じり合っている場合があります。ここで、安逸の意味を冒頭の、堕落した罪多き暮らしの意味にとりますと、怒られてしまいますので、安逸の意味を再定義しますと、安逸とはより広い意味で、この世での安全安心を図るために、この世の喜びや楽しみ、趣味や娯楽によって守られようとすることであります。この様に再定義しますと、安息と安逸ということは、誰しも、そのうちにごちゃまぜにして、あわせもっている事柄であると言わざるを得ないでしょう。理想としましては、四六時中、神と共にいまして、四六時中、神の言葉を聞いて神の言葉を語るというのが理想なのですが、この世にあってそんなことが出来るのは誰一人いないことでしょう。

アウグスティヌスという古代の牧師が面白いことを言っています。

金や銀、宴会やぜいたく、狩猟や魚釣り、格闘技や演劇、滅びゆく名誉の追求や獲得などは、この世の死によって終わってしまうことで、永遠に続くまことの喜びではない。では、まことの喜びは何処に在るのか。それは聖書の内に聞かれ語られる神の御言葉の内にある。私たちは、この世の様々な喜びを、その都度、執着しつつ飛び越えながら、益々、神の御言葉というまことの喜びに引き寄せられ、遂には、この世の死をも飛び越えて、永遠の喜びに入れられるのだと。

アウグスティヌスは、金や銀、宴会やぜいたく、狩猟や魚釣り、格闘技や演劇、滅びゆく名誉の追求や獲得などを頭ごなしに否定はしていないようです。なぜなら彼自身、クリスチャンになったのは結構年を取ってからであり、それまでは、これらの安逸の中に我が身をおいて、時にはその安逸に身を預け、様々な葛藤を経験して来たからに他なりません。そして彼はこれらの安逸の中に、永遠に存続するまことの喜びはない、ということを我が身をもって悟り、この様な２の次の喜びにずっととどまっていようとせず、必ず、まことの喜びである神の御言葉のほうへと飛び越える日が来るのだ、ということを証ししているのです。

たまたま、先日の木曜祈禱会で、私たちがこの世で黙り込んで安全安心を確保し安逸にやり過ごそうとする姿勢から、黙っていることが苦しくなって、口を開き新たな喜びのほうへと飛び越える様子が黙想されましたが、ご紹介しておきます。詩編３９編です。

わたしは言いました。「わたしの道を守ろう、舌で過ちを犯さぬように。神に逆らう者が目の前にいる。わたしの口にくつわをはめておこう。」

わたしは口を閉ざして沈黙し／あまりに黙していたので苦しみがつのり

心は内に熱し、呻いて火と燃えた。わたしは舌を動かして話し始めた。

「教えてください、主よ、わたしの行く末を／わたしの生涯はどれ程のものか／いかにわたしがはかないものか、悟るように。」

私たちは、この世の安逸に固執していますと、それは永遠でないゆえに、やがて苦しみに苛まれます。その時主イエスの御言葉に招かれる人は幸いであります。しかし、あくまでこの世の安逸にしがみついて、そこに留まろうとする人は、主イエスの御言葉を受け取ることが出来ず、時には御言葉に敵対してくることにもなるでしょう。

では今日の聖書箇所に入ります。今日のルカ福音書の箇所は、金持ちとラザロとが、死後に受けた報いについて語るイエス様のたとえ話であります。このたとえ話のテーマは、今日の説教題に即して言えば、安息と安逸の間の断絶ということでありましょう。この世で安逸に暮らし続けたこの金持ちは、死んでから、ラザロやアブラハムがいる安息の地のほうへ渡ろうとしてもできないし、超えてくることも出来ないということです。この断絶ということが私たち人間にとって、一番恐ろしく、心しておくべきテーマであろうと思います。

私たちは、この世にあってみな罪人であります。時にはこの世の安逸に身を浸してやり過ごさないと、その一生を全うできないような、罪にまみれた危うい心と体を以って、この世を過ごしているのです。しかし、そのようなこの世の生活にあって、救いの道がいつも指し示され開かれています。それがイエス様の道であります。例えば私たちが、宴会やぜいたく、狩猟や魚釣り、格闘技や演劇などで、この世の安逸を得て、満足したとしても、それらには時間的な限度があり、ありていの言葉でいえば、やがてそれらに飽き飽きして、もっともっと大きな満足と喜びを得ようとして、のめりこんでいくのです。それに夢中になればなるほど、何かそこにとてつもない喜びがあるのではないかと思いこんだりもします。それはそうかもしれません。でも確実なことはアウグスティヌスがいう様にそれらの喜びの一切は、この世の死を以って終了してしまうという事実であります。

この金持ちが、死んだ後に安息の地から断絶されてしまった理由は、いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていたからだとは言い切れないでしょう。彼が、断絶されてしまった最たる理由は、彼が、この地上を歩んでいる間に、モーセと預言者が語る神の御言葉に聞く耳を持たなかったからに他なりません。

聖書は「モーセと預言者」という語句で何を指し示しているのでしょうか。それは、モーセから、アモス、イザヤ、エレミヤ、アウグスティヌス、ルター、そして現代にあって神の言葉を語るように御言葉を預かっている一人一人の説教者のことであります。そういう意味で「モーセと預言者」というのは、過去の人のことではなくて、むしろ、今ここに生きている人のことを指示しています。又、説教者だけではなく、万人預言者という言葉はないようですが、それにしても、それぞれの場面で、神の御言葉を語るように召されている信者さん一人一人も、この預言者の一人に数えてよいかもしれません。

御言葉を聞くということには、この世の死というタイムリミットが設けられているということを今日の聖書箇所は語っています。貧しいラザロは死んで安息の地へと入れられました。しかし、この安息について身をもって十分に知っているラザロが、生き返って、この世に戻って来たとしても、この世で生きる金持ちの兄弟たちに、その安息を告げ知らせることは出来ないというのです。それは、もうラザロが完全に安息の地の住人になってしまっていて、この地に住む私たちとの間に、どうやっても飛び越えられないふちが設けられてしまっているからでしょう。

では、この地上で、安息と安逸とが入り乱れた日々を送っている私たちの耳に、御言葉を届けてくれるのは誰かと言いますと、それが今を生きる預言者たちであります。今を生きる預言者たちも、まだ完全に安息の地に入れられている訳ではありません。このことが実は大事であり、どんな預言者でも、この地にあって安息と安逸の間を行き来しながら、その葛藤の中で、苦しみながら、託された神の御言葉を語っているのです。それでそういった体験を経て、かえって、安息と安逸の違いを身をもって悟り、安息の永遠のまことの喜びと、安逸のはかない喜びの違いを身をもって感じることになるでしょう。そして、そのような葛藤や苦しみを体験しながら御言葉を語っていく中でこそ、この地上にある全ての人々がそれに自ずと共感を覚え、主の御言葉の内にこそ、永遠のまことの喜びがあることに気付かされることになるのでしょう。

アブラハムが『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう』と言ったのはそういう意味であります。

預言者が体験する葛藤や苦しみのわかり易い例が、昔の預言者になりますが、ヨナ書に記されたヨナの姿であります。彼は、最初から最後まで、主の御言葉を語るという召命が、イヤでたまらず、チャンスがあれば主の前から逃げ出したいと思って、そのように行動したりもします。しかしそれでも常に主によって導かれ守られ、主の命令に従います。ニネベの都では「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」と一言、御言葉を預言しただけで、王様をはじめすべての人々が悔い改め、救われたというのですから、すごい宣教の成果でありますが、ヨナ自身は、こんなに簡単にニネベの人たちが救われたことが気に食わなかったのでした。この様なヨナの姿は、安息と安逸の間で揺れ動かされる、私たち人間の姿を如実に物語っています。

さて、今この地上を一人の預言者として歩まされている私たちが、イエス様の御言葉を告げ知らせていく上で拠り所となるのが、マタイ福音書の２８章19-20節に記されているイエス様ご自身の御言葉、いわゆる大宣教命令であります。

「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

私たちが、隣り人に御言葉を語るということは、時には勇気がいることであります。ですが、私たちは、この様に、この地上にいる間に、永遠の喜びを告げ知らせる御言葉を語るのにふさわしい器として、イエス様から召されているのです。今日の金持ちは、死んでから「父アブラハムよ、私を憐れんで下さい」と大声で行ったのですが、遅すぎました。

どうか、私たちが憐れみと慈しみに満ちた主イエスと共にこの地上を歩んで、その主の憐れみと慈しみを隣人に告げ知らせるものとなりますよう、この安息の日に、主なる神に祈り願います。

祈ります

天の父よ

主よあなたは、この世に多くの喜びを置き、私たちがそれによって豊かに暮らすことが出来るように配慮されています。しかし、私たちは、それがあなたからの恵みであることを忘れ、あたかも、自分たちが作り出した喜びの様に思い込み、それに酔いしれ勝ち誇っている愚かな者です。どうかそんな私たちを憐み赦して下さい。私たちがあなたのもとに安息し、心から安心して、あなたに感謝し讃美をささげる者とならしめてください。

私たちは、この世の安逸がいつしか過ぎ去ってしまうことを恐れ、あなたから頂くまことの喜びに気が付かないまま、悩み苦しんでいます。どうかそんな恐れを私たちから取り去って下さい。この世では終わらない安息のときを私たちにお与えください。

殊に、あなたを知らない国々の為政者たちから、おそれや不安を取り除き、その政治が、終わることのない希望の喜びによって、導かれます様に、お祈り致します。